

[セッション II]

「いつも既に再びトラウマ・ツーリズムと記憶文化の政治学」

ローリー・ベス・クラーク（ウィスコンシン大学マディソン校教授）

本発表の目的はトランスナショナルな視点からトラウマ・ツーリズムに取り組むことである。私は四大陸でおこなったフィールドワークと、文献およびネット上の資料から、残虐行為、すなわち戦争、住民虐殺、国家テロリズム、奴隷制度、アパルトヘイト、核爆弾等を記念するために登場した文化的構築物の類似点と相違点を調べている。私の研究の主な事例は、ヨーロッパ（ドイツ、ポーランド）、アフリカ（ガーナ、ルワンダ、南アフリカ）、アジア（カンボジア、日本、ベトナム）、南米（アルゼンチン、チリ）に見られる。

各々の事例は、想起されるトラウマの性質と、記憶文化に関する現地に既存の慣習の双方により、独特な変化を見せている一方で、現地の様相は世界中のどこへ行っても驚くほど類似している。記念に関する語彙が比較的限られて、つまり、同じような比喻やデザインが用いられていることは、限られた特定の建築家たちがコンペに応募したり、審査をしていることを露呈しているともいえるが、同時に学芸員、行政担当者、見物人、利害関係者たちが極めて国際化した期待を持っていることを示している。

トラウマ・ツーリズムは激しい議論を呼ぶ行為で、そこでは競合する利益（生存者と犠牲者の家族、目的を持ってやって来るツーリストと偶然居合わせたツーリスト、政府組織と非政府組織、私立財団と公益法人、保護主義者と活動家など）が確立されたパラダイムに従ったり抵抗したりしている。記憶の目的（すなわち、贖罪、和解、追悼、正義、復讐）からマーケティング、礼儀作法に至る、幅広い問題をめぐって緊張が生まれる。私は、トラウマ・ツーリズムが、どちらかと言えば社会的な権力を保持している関係者が多く集中している場所で、最も「成功」しがちな点を指摘する。